都野神社「焼組香奉納額」の概要

資料№2-1

１　名称・員数　　都野神社「焼組香奉納額」・１面

２　所　在　地　　長岡市与板町与板6044　都野神社

３ 概　　　要

宝暦九（1759）年２月に都野神社（与板八幡宮）社頭で催された、焼組香と一炷聞の香席の後に奉納された額である。願主は、当時与板の商人・東備前屋の江口朋光である。幅２尺、長さ７尺、欅の一枚板に、墨字で趣意と参加者の氏名等が記される。当時の与板町の町人文化が、いかに成熟したものであったかを今に伝える資料で、保存状態も良好である。

「与板の香道について」　　　　　　　　　　　　（『与板史こぼれ話』前波善学／編より）

与板の香道がいつのころから入ったかは未詳であるが、おそらく宝暦前後が最盛期で、八幡社頭のこの大がかりな催しもそのあらわれだろう。願主の江口朋光は当時随一の富豪といわれた備前屋江口の分家、東備前屋の当主で、同家過去帳によると本名弥兵衛安永五年没、茶香の達人とあるから、彼が商用のためしばしば大坂方面に往来した時学んだものと思われ、額に記された当日の社中も恐らく彼の門人であろう。長明寺善康は彼に学んだ同寺九代の住職、山田重記は良寛和尚に私淑した杜皐の実父、三輪長旧は同じく同和尚に傾倒した三輪左市の実父、三輪弘高はその分家、いずれも当時この町の錚々たる文化人である。殊に浪花（大坂）から大口樵翁が列席していることは注目に値する。彼は石州流から出て大口流の茶道を立て、当時大坂にあって門戸を張っていたから、江口朋光もその門に出入りして茶道と香道を習うたものであろう。いずれにせよ、二百年の昔、京坂から樵翁ら三人、江戸から一人を招待して開かれたこの香筵の豪華さは瞠目すべき偉観と云わねばならぬ。筆者はこの道について全くの素人であるが、視聴覚を通して受け入れる美術工芸音楽その他の芸術に比べ、より進んだというては当たらぬが、少なくとも繊細な、ひそやかな感覚を要するであろう香道は、一般大衆向けというよりも、特殊の人たちに受け入れられるものかと思われる。

（中略）

このように香道は茶道華道と並んだ日本独特の芸道であるが、当時北越の地にどの程度流布されていたか、二百年前のこの記録は注目されてよいであろう。